

「――廃部？」

三分間のラウンド練習を終えるプザーの合図とともに、比嘉は渾身の力を込めて黒いサンドバッグを右ストレートで打ち抜いた。天井から太いチェーンで吊るされた黒い砂袋が、ギシギシと音を立てて揺れる。

「ああ。俺もさっきヤマセンから聞いたばかりなんだけど。今年から予算の削減で、部員数が六人に満たない部は無条件で廃部にされることになったらしい」

練習場に入ってくるなり不穏な情報を伝えた三年生でキャプテンの東野は、ため息混じりに汗だくの比嘉にタオルを投げた。

ヤマセンは顧問の山崎先生のあだ名だ。ボクシングの経験者ではないが、前監督の定年退職後、新たな顧問が必要となり、校内で最も気弱な数学教師をつかまえて半ば脅す形でお願したのだ。

「部員なら、先週仮入部の新入生が山ほど来たはずでしょう。それがどうして急に廃部になるんですか」

比嘉はタオルで額の汗を拭きながら、東野に尋ねた。

日当たりの悪い体育館裏に設けられたボクシング部の練習場は、ずっと昔に廃部となった柔道部の道場を改築して造られたもので、建物だけは立派だが風通しが悪く、少し動いただけで体中から汗が白い蒸気となつてもうもつと立ち込める。

東野はやれやれといった表情で五分刈りの頭を掻いた。

「全員辞めた」

「なに」

「お前のしごきが厳しすぎたせいだ。素人相手にマジになりすぎた」

驚愕する比嘉に、東野は呆れたような視線を向けてくる。

昔は強豪として名を馳せた大和田高校ボクシング部も今ではすっかり衰退し、現在の部員は五人だけ。キャプテンの東野を含めた三年生が二人と、二年生が三人。ただし比嘉以外の二年生はどちらも幽霊部員だった。

「ちよつと、キャプテン！ しごくなんて人聞きの悪いこと言わないでくださいよ。先週やったのは外周二回りしたあとにロープを三ラウンド。腕立て、腹筋、スクワットだって三十回を五セットずつ。これのどこが厳しい練習だっていうんですか」

比嘉は拳にはめていたグローブを乱暴に脱ぎ捨てた。インターハイ予選が近い大事な時期にもかかわらず、仮入部でやってきた新入生の面倒を比嘉が一人で見たのは、東野たちに迷惑をかけたくなかったからだ。

三年生は六月の試合を最後に引退となる。高校三年間でまだ一度も公式戦に勝つたことがない先輩二人を、比嘉はできる限り練習に集中させてあげたかった。

「気持ちよくなるけどな比嘉。ほかにも運動部はたくさんあるのに、わざわざボクシング部を選ぶやつなんて、大抵楽に喧嘩に勝つ方法を知りたいだけなんだよ。それなのに初日からゲロ吐くまで練習させて、そりゃみんなやつてらんねえって逃げ出すわな」

「そんな」

「とにかくこのままじゃうちは廃部になる。少しでも責任感してるなら誰か勧誘してきてくれよ。俺もさっき一年生の教室を回ってきたけど、めばしいやつはほかの部にとられてもう残ってねえのな」

廃部判断の期限は仮入部期間の終わる今週末まで。

東野からそう告げられたところで、プザーが鳴り休憩時間が終わった。ボクシング部の練習は三分間のラウンド

と一分間の休憩を繰り返す形で進むのだ。東野がリングにあがり、シャドーボクシングを始める。すでに廃部を覚悟しているのか、その横顔はいささか気落ちしているように見えた。

たまたま、比嘉はタオルを首に巻き、練習場を出た。

——廃部なんて冗談じゃない。

わざわざ偏差値のレベルを下げてまで、比嘉が大和田高校を受験したのはボクシング部があったからだ。サッカー部や野球部と違い、ボクシング部のある高校は県でも五校しかない。

七年前に起きた試合中の事故で父が死んだあと、比嘉は将来プロボクサーになって父の屈辱を晴らすことを夢見て生きてきた。

あの日、父の動きは明らかにおかしかった。顔色が悪く、繰り出すパンチも精彩を欠き、普段は力強いステップを踏む足も二ラウンド目からふらついていった。

幼い比嘉から見ても、父が何者かに薬物を盛られたのは明らかだった。

当然、父の所属ジムは対戦相手の陣営を疑ったが、出てきた証拠は覚せい剤の薬物反応を示す父の尿検査結果だけ。ドーピング目的で普段から常用していたのだろうと言われてはお終いだった。

検死上の死因はあくまでも、ダウン時にリングに後頭部を強打したことによる急性硬膜下血腫。

それから七年経った今でも、父の死の真相は明らかにされていない。かつて国民的ヒーローだった父はドーピングをした選手として汚名を着せられ、二度の防衛記録ごと完全に存在を闇に葬り去られている。

比嘉はそれがたまたまなく悔しかった。父は絶対に覚せい剤なんてやっていない。

父の汚名をすすぐためには、息子の自分が世界チャンピオンになってタイトルを取り返すしかない。

その日を境に比嘉は変わった。友人たちからの遊びの誘いを断り、今まで以上にボクシングの練習に明け暮れる

ようになった。一日も早くプロになりたかったが、プロテストの受験資格は十七歳にならないと与えられないため、それまではアマチュアで実力を磨くことにした。

ジムに通うかたわら入った高校のボクシング部は弱小で、優秀な監督も強い先輩もいなかったが、それでも比嘉は毎日ひたすら練習に打ち込める環境があることに満足していた。

だから、絶対廃部になんてさせるわけにはいかない。何がなんでも新入部員を見つけなくては。

比嘉はきつく唇を引き結び、体育館から校舎へとつながる渡り廊下を歩いた。

四月も終わりに近づき、つい先日まで咲き誇っていた中庭の桜はすでに散り、校舎の裏手に広がる里山も日に日に緑が濃くなってきている。東野の言う通り、この時期になってもまだ入部先が決まっていない新入生をつかまえるのは至難の業かもしれない。

それに、入部してくれるなら誰でもいいというわけでもない。

ボクシングは危険なスポーツだ。互いに殴り合うのだから当然怪我をする。減量もあれば、父と同じように試合中の事故で命を落とすことだってある。本人の意志なしでもとも続けられない、強い精神力と不屈の忍耐力が必ず要とされるスポーツなのだ。

三百人を超す新入生たちの中から、そんなタフな人材をどうやって見つければいいのか。

渡り廊下の行く手をふさぐ雀の群れを避けながら、食堂の前にさしかかると、比嘉は自動販売機の近くに人だかりを見つけた。バスケットボール部にラグビー部、バレー部にハンドボール部……それぞれカラフルなユニフォームを着た体格のいい男子生徒たちだ。

「だから、何度も言わせるんじゃないやねえよ！ いい加減どの部にするか決めろって言ってんだ！ いつまでものらりくらりかわしやがって！」

輪になって立つ彼らの中央に、学生服を着た一際背の高い頭がひよこりと見える。長い前髪で隠れて顔は見えないが、こちらも男子生徒だ。上履きの色が青だから、新入生だろう。

「あ……あ、あの」

「聞こえねーよ！ はつきり喋れ！」

ラグビー部のマツチョに肩を押され、少年の背がどんと自販機にぶつかる。

校内での喧嘩はめずらしくないが、いくらなんでも多勢に無勢だ。見ていられず、比嘉は声をかけた。

「何やってんだ、お前ら」

「あん？ 何だお前」

ラグビー部が振り返る。しかし、比嘉の顔を見るや、さっと顔色を変えた。「比嘉だ」「ボクシング部の比嘉だ」

「高校三冠の……」と周囲にどよめきが広がる。

比嘉は去年、全国大会で優勝するたびに全校生徒の前で表彰されたため、校内でちょっとした有名人になっていた。

「ほどほどにしとけよ。一人に寄ってたかって、格好悪いぜ」

ため息混じりに、比嘉は人垣を押しつけて輪の中に入った。新入生の少年はとても背が高い。おおかた恵まれた体格を見込まれ、強引な部活動の勧誘を受けている最中だったのだろう。

「うるせえな！ あつち行け、このチビ！」

「チビには関係ねえだろ！」

「なんだと？」

ぴくりと眉が吊りあがる。聞き捨てならない台詞だ。比嘉はチビと言われるのが一番嫌いだった。

いつか伸びると信じていた身長は高校二年になっても、百六十三センチからびたりと動こうとしない。

耳を覆い隠す長さの栗色のやわらかい髪と、男にしては狭い肩幅のせいもあって、私服を着て街を歩いていると女に間違われることも度々あった。

コンプレックスを刺激され、比嘉が思わず拳を構えたときだった。

「智兄……？」

この場に似つかわしくない、のんびりした声が新入生の口から聞こえ、比嘉は後ろを振り返った。

百八センチは超えていそうなひよろりとした高い背に、黒糖パンのようにこんがり焼けた肌。

縮れた黒い髪の下からは、垂れがちな瞳が瞬きを繰り返しながら、食っているように比嘉を見つめている。

「ああっ！」

比嘉はそこでようやく記憶がよみがえった。少年を指さし、大声で名前を呼ぶ。

「お前、大輔か？ 昔、近所に住んでた、瓜生大輔！」

そうだ。間違いない。比嘉が小学校を卒業すると同時に、東京へ引っ越していつてしまつて以来、一度も会うことがなかった泣き虫の大輔だ。

まさかこんなところで再会するとは思っていなかった。

「いつこつちに戻ってきたんだよ。久しぶりだな。うわっ、でかくなつちまつて。本当に新入生かよ」

比嘉は感激のあまり、瓜生の肩をばしばし叩いた。

小学生のときも大きな体をしていたが、今の瓜生は当時と比べものにならない。ガリガリだった体は高校生らしく厚みがつき、学ランは丈がどこも窮屈そうだ。

しかし、再会を喜んでいる暇もなく、ラグビー部とバスケット部が瓜生の肩に腕を回し、比嘉から引き離してしまつた。

「おいおい、比嘉ちゃんよ。今こいつは俺らと話してんだ。横取りしようたつてそうはいかねえぞ」